

新書紹介

都市再生

ロバータ・B・グラッツ 著
富田鞞彦 宮路真知子 訳 林泰義 監訳
晶文社 三百七十三頁 三千八百円

冒頭に「簡単に「計画」や「公式」に応用できる新しい原則を創ることは本書の目的ではない。」と書かれています。筆者が考える都市再生の成功事例を眺めていくうちに、キーワードが浮かんできます。それは「都市の養育」。ここでは特に都市の「市」に注目してください。ご存じのとおり、漢字は表意文字ですので、字そのものに意味があります。例えば「都」は集める・統べるという権力を意味する部分と権力に屈する人民の姿からできています。一方「市」は、昔、交換のための市場が立った場所を意味しており、その言葉からは活気、経済、自立、自由などのイメージが湧くと思います。

見に同調するかのようには、筆者も「市」の要素を重要視してきます。また創造や建設ではなく、養育ということには失敗しながらも繕っていくというイメージがある点も重要です。そして、この「都市の養育」をキーワードとして、アメリカのさまざまな事例を読み明かしていきます。その手法は大規模開発（スラムクリアランス）、郊外型ショッピングセンター、歴史的建造物の保存など、なじみ深いものですが、それが成功したか否かの判断基準は、最終目標としてのものができたことではなく、従前の都市形態が継承発展したかどうかです。

この考え自体が、日本では住民にまで浸透していないような気がします。特に歴史的建造物の保存に関しては、保存そのものが最終目標になっている事例が多いのではないのでしょうか。北海道の小樽を、それも運河

沿いのプロムナードを歩いたことのある人は多いと思います。たとえ運河の半分とはいえ、道路建設から除外されて保存されたことはとても素晴らしいことですが、以前の運河を知っているものにとっては、何となく今の運河に馴染めません。プロムナードになって車の往来の心配をしなくてもノンビリと歩けるようになり、夜みせる顔も格段に奇麗になりました。おまけに周辺には洒落た店ができ、観光客も増えたのは判るけれど、運河が展示物に見えて、生気がなく水すら淀んでいるように感じました。また小樽の民宿の主人も同様の意見に加えて、「小樽で有名なガラス店の商品はこの地で作っているものではなく、ただ運んできて販売しているだけ、この街のものではない。本当の小樽の土産を買うのなら、実際に目の前でガラスのグラスを作っている工房があるから、そっちで買ってね。」という発言を付け加えました。実際に目の前でグラスができていく過程は楽しいものでしたし、気軽に店の人と話せるパママストアのような雰囲気があり、これが本当の小樽だ、という印象を受けました。

その印象からか、当時これは本當の意味での歴史的建造物の保存なのかという疑問は残りましたが、わたしだけの感想かもしれないと思っていました。しかし本書の『名作建築の切れ端は保存しても、これらの建物を織り込んだ都市構造そのものを救うことを忘れる。外部者指向のプロジェクトはうまく行き過ぎて、外部者が地元を圧倒してしまうかもしれない。』という一文が、独りよがりの感想ではないという確信を抱かせてくれました。

本書で特に印象に残ることは、「コミュニティ・スピリット」ともいうべき、市民の都市に対する愛情の深さですが、これが筆者がいうところの都市の再生『都市構造を保存すること。宝物のように大切な古いものと、必要な新しいものを共に織り込むこと。』の根底に存在します。日本では都市は自分たちで作っていくものという意識がなく、ただそこに住んでいるだけという意識の人が多いようです。これでは愛情も湧かないでしょうし、真剣に都市を再生する意欲もないでしょう。すぐにこの意識を変えることは困難ですが、愛情をもつための手初めとして

都市を知ってもらうことは、まだ容易にできそうです。長崎では、都市の成り立ちに沿って歴史、食文化などの多彩な話題で長崎のことを三時間にも渡って話す人が出会いました。このような人が増えれば都市は変わるでしょう。

そのほかにも、本書にはアメリカと日本の法体系や市民意識の違いを通り越した助言で一杯です。

最後に一例を挙げれば、一九四〇年、ロックフェラーセンターの竣工時のロックフェラー二世の「はじめの計画とはずいぶん違ってしまいました。希望と理想でスタートしたこの物語りは、筋書きが変わって余計におもしろくなったのです。」という挨拶。筋書きが変わって「素晴らしいことだ」といっています。これも読み替えれば、自治体の職員は、先人の判断に縛られざるを得ない面が強いが、「養育」という考えに立てば、判断を柔軟に変えていくことも重要なことのひとつではないか、というように・・・。

△(都市計画局ポータルサイト開設事務所 續橋宏昭)▽